

道中記にみる出羽三山参詣の旅

岩 鼻 通 明

- I. はじめに
- II. 歴史地理学的題材としての道中記
- III. 出羽三山参詣道中記の分布と作成年代
- IV. 出羽三山参詣の行程
- V. 出羽三山参詣の廻国巡礼的性格
- VI. おわりに

I. はじめに

近年、歴史時代の交通に対する関心が高まりつつある。それも、従来の交通史研究においては宿駅や助郷、あるいは陸運・水運といったテーマが中心であったのが、最近では中近世の紀行文学等を題材とした、旅そのものをテーマとする著作が陸続と刊行されるに至っている¹⁾。

しかし、それらの多くは個々の紀行文の解説にとどまり、中近世の旅の特質を抽出することまでには及んでいない。また、そこまで言及しているものについても、私見では不適切と思われる言明が散見する。

そこで、本稿においては出羽三山参詣の旅の記録である道中記を手がかりにして、歴史地理学的立場から、江戸時代を中心とする社寺参詣の旅について考察を試みたい。

さて、社寺参詣の歴史に関して「現段階における最高水準の大著²⁾」と評される新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』の基本姿勢は、その序文中にみられる「人々が自己の意志によって営む自由な旅の大半は社寺参詣である」という一文であろう³⁾。

新城常三に代表される社寺参詣研究の特徴は、その書名にもみられるように社会経済史的考察

が中心となっている点である。具体的には、旅籠代等の道中の必要経費の検討をはじめとする分析が行われ、その結論として導き出される常套句が、「江戸時代の社寺参詣は物見遊山である」という一文である。今野信雄『江戸の旅』などは、まさにこの観点から記された典型といえよう⁴⁾。

また、山本光正は「近世は多くの人々が旅をした時代ともいえるが、なかでも社寺参詣を名目に楽しみとしての旅、物見遊山的な旅が盛んに行われるようになったことに特長がある」と述べ、「そこで本稿では伊勢参宮を信仰としての旅という観点からではなく、行楽・物見遊山的な旅としての側面を把えてみたい」とする⁵⁾。もちろん、山本光正は信仰心に基づく旅の存在を否定しているわけではないが、従来の研究には、社寺参詣を「信仰としての旅」と把握する姿勢が欠落していたところに問題がある。

そこで、本稿においては、近世の社寺参詣を宗教地理学の視角から分析を加え、社寺参詣が、ほんとうに自己の意志による自由な旅であったのかどうか、また、それを物見遊山と断言してよいものかどうかについて批判的に検討を試みたい。

II. 歴史地理学的題材としての道中記

道中記は、旅人が旅行中のさまざまな出来事を綴った記録である。今日のガイドブック的な木版刷の旅行案内書もまた道中記と称されることがあるが、本稿で単に「道中記」と記す場合は前者を指すものとする。

さて、道中記を史料として活用した研究が、

近年いくつかみられる。まず、原田伴彦『道中記の旅』をあげることができるが、ここでとりあげられているのは、いずれも近世の著名な紀行文であり、また社会経済史的分析が主となっている⁶⁾。

それに対し、在地の古文書を活用した道中記の研究として、小野寺淳、桜井邦夫、山本光正、小松芳郎、酒井敏明らの論文をあげることができる⁷⁾。

さて、近世の道中記は、史料として稀少価値があるというものではない。むしろその逆で、たとえば西垣晴次は、史料としての道中記について、「人々が伊勢参りをした時に書き残されるのが、伊勢道中記、伊勢参宮記などと題される記録である。最近ではこれらの記録が市町村史などで活字化されることも多くなり、それに伴って市町村史の本文で記述されるようにもなった。これらの記録の記述は個性的なものではなく、はなはだ類型的であるので、同様な史料に目をとおしていないと、ごくつまらぬありふれたことをさも重要なことのように書いてしまうこともあるようである。市町村史を読む者も注意しなくてはならない。道中記は伊勢参宮銭別帳や留守見舞帳などの関連の記録などととも利用されることで新しい視野もひらけてくるであろう」と述べ、その利用価値をさほど高く評価していない⁸⁾。

事実、道中記を題材とした研究は社会経済史的考察にとどまる場合が多く、社寺参詣の研究に新しい展望を開いたとは言いがたい。しかし、その中で注目すべきは、小野寺淳と山本光正が展開しているモデルルート論である⁹⁾。両論文では、複数の伊勢参宮道中記の分析の結果として、地域的・時期的にモデルルートが存在することを指摘している。

旅とは、日常的な生活世界から離れて、その外縁に拡がる非日常的空間へと一時的に脱出する行動である。したがって、歴史地理学的立場からは、まず、旅人の空間的行動を道中記から復原し、その行程をルートマップとして把握する作業が不可欠であり、また、何点もの道中記

のルートと比較検討してモデルルートを抽出することは、道中記の歴史地理学的研究の基盤となる。出羽三山参詣道中記を考察対象とする本稿も、まず、この行程の復原から出発したい。

ところで、桜井邦夫は東北地方から出羽三山への旅に論及し、数点の道中記の検討の結果として、出羽三山への長期の旅は物見遊山的性格を持つ、出羽三山と一口に言っても必ずしも全ての山に参詣するのではない、という2点の指摘を行っている¹⁰⁾。

後者については既に別稿で反論を展開したが¹¹⁾、本稿においては前章でも述べたように、出羽三山参詣が物見遊山的性格を有していたかどうかを、参詣行程の復原を通して検討したい。

Ⅲ. 出羽三山参詣道中記の分布と作成年代

筆者は、かつて民俗地理学的立場から出羽三山信仰の各地の事例を比較検討し、その信仰圏を措定したが¹²⁾、今回は信仰圏内に残存する出羽三山参詣道中記を求めて、各県の図書館、文書館、博物館等で史料調査を実施した。その結果、100点を上回る出羽三山参詣道中記の所在を

表1 出羽三山参詣道中記の所在

	～1820	1821～ 1840	1841～ 1860	1861～	年不明	小計
青森県			3(2)	1		4(2)
秋田県	5(4)				1(1)	6(5)
岩手県	3(3)	4(4)	8(4)	13(4)		28(15)
宮城県				1		1
福島県	1	3	2	5		11
山形県		1	3	2		6
新潟県	3		1	1		5
栃木県	2		7	6	1	16
茨城県	1	2	1	1		5
群馬県		3	2			5
千葉県	1	4	2	15	1	23
東京都			1	1		2
埼玉県			2	1	1	4
神奈川県			1	1	1	3
その他	6	2			2	10
計	22(7)	19(4)	33(6)	48(4)	7(1)	129(22)

()内の数字は、伊勢西国参詣の途中に出羽三山に参詣したもの

確認することができた¹³⁾(表1)。

本章では、まず、それらの道中記の県別の分布と作成年代について比較検討したい。史料調査の結果、出羽三山参詣道中記は東北6県、関東1都6県、および新潟・静岡両県に存在することが確認された。その分布は、前稿で推定した出羽三山の信仰圏とおおむね一致する¹⁴⁾。もっとも、今回の史料調査で収集された出羽三山参詣道中記は、おそらくは氷山の一角であり、また、調査の及ばなかった府県に存在する可能性も残されている。

各県ごとの史料の所在点数にはかなりばらつきがあり、岩手・千葉・栃木・福島県には10点以上の道中記が存在し、出羽三山信仰が盛んであったことを物語る。しかし、史料の所在点数の大小は、先行研究の有無、あるいは地方史誌類の編さん状況、史料目録の整備等によって大きく左右されるため、客観的に比較できるバロメーターにはなりえない。

たとえば宮城県においてはわずか1点の道中記しか収集できなかったが、在地史料の整理が進展すれば、もっと多くの道中記が発掘されることが期待される。ただし、山形県内にも、さほど多くの出羽三山参詣道中記が残っているわけではなく、里先達が参詣者を引率することの多かった出羽三山の近隣地域では、道中記を記録する必要が少なかったとも考えられる。

なお、表1の「その他」の項目には、静岡県 の道中記1点以外に、著名な紀行文5点(曾良『奥の細道随行日記』、菅江真澄『遊覧記』、古川古松軒『東遊雑記』、野田泉光院『日本九峰修行日記』、高山彦九郎『北行日記』)、および版本の道中記4点が含まれる。

次に、出羽三山参詣道中記の作成年代について検討したい。小野寺淳は伊勢参宮道中記の分析から、参詣ルートが18世紀後半、19世紀半ばすぎ、明治以降の3時期に区分されることを指摘している¹⁵⁾。

本稿では、この年代区分を参考に、1820年(文政3)まで、1821年(文政4)から40年(天保11)、1841年(天保12)から60年(万延元)、1861年(文

久元)以降、の4つの時期に区分して集計を行った。その結果、1861年以降の道中記が最多で、次いで1841年から60年のものということになった。前稿で検討した出羽三山碑の作成年代の場合は、文化・文政期(1804~30)と、天保年間(1830~44)の石碑が多いという結果が現われたが¹⁶⁾、道中記の作成年代のピークは石碑の場合より少し遅くなっていることが判明した。

しかし、石碑の場合は1000点弱とサンプル数が多いのに対し、道中記はサンプル数が100点余のため、同一基準で比較することには問題もあろう。たとえば岩手県と千葉県では、明治期の道中記が大量に存在するため、これらが1861年以降の道中記の過半数を占め、その比重を高めるに至っている。

また、石碑の場合と同様、18世紀前半の道中記はほとんどみられず、元禄2年(1689)の曾良の『奥の細道随行日記』を除けば、享保4年(1719)の栃木県の「湯殿参詣道中帳」が最古の史料となる。享保以降、版本の道中記や名所図会、道中案内図の類が多く刊行されるようになり¹⁷⁾、出羽三山参詣道中記の増加もそれらに歩調を合わせたものと想定される。

一方、石碑については大正・昭和に入っても建物が継続されるが、道中記の方は大正期のものが2点みられるものの、明治中期で作成はほぼ終焉を迎える。これは近代交通機関の発達と対応するものと考えられる。定時性を有する公共交通機関が利用可能となれば、道中記を作成する必要もなくなるということであろう。

最後に、参詣季節と行程について言及すると、南東北・関東と北東北からの出羽三山参詣には大きな差異が存在する。まず参詣季節については、南東北・関東からの参詣は開山期の夏に行われる。しかし、北東北からの参詣は農閑期の冬に行われるため、月山と湯殿山には登拝できず、標高の低い羽黒山のみの参詣となる。さらにその行程も、伊勢西国参詣の途中に出羽三山にも参詣するというコースになり、出羽三山を主目的地とする南東北・関東からの参詣とは行程を異にする。

そこで本稿においては、これら伊勢西国参詣の途中に出羽三山に参詣する道中記はひとまず対象外とし、稿を改めて検討することにして、南東北・関東からの道中記を考察の主たる対象としたい。

なお、100点余の道中記の中には、史料目録上でその所在が判明するにとどまる事例も少なくなく、参詣行程の復原可能な道中記は計40点程度である。次章では、これらの道中記を読み解いて、参詣行程の復原を進めたい。

IV. 出羽三山参詣の行程

本章では、出羽三山参詣道中記の行程を復原し、それを図示して比較検討を試みたい。ただし、紙数の関係もあり、全ての道中記を紹介することは困難なため、各県ごとに若干の代表例を山本光正の記載方法を踏襲して紹介してみたい¹⁸⁾。

(1)表題 湯殿山月山羽黒山鳥海山金峰山山寺参行者道中記¹⁹⁾

筆者 出羽国河辺郡船岡村(秋田県仙北郡協和町) 五十嵐孫之丞

期間 寛政5年(1793)7月9日~28日

行程 在所一本庄一吹浦一鳥海山一酒田一鶴岡一金峰山一羽黒山一月山一湯殿山一本道寺一寒河江一山寺一天童一尾花沢一横堀一横手一在所(図1)

(2)表題 大徳院文書²⁰⁾

筆者 陸奥国和賀郡立花村(岩手県北上市立花) 大徳院

期間 元治元年(1864)7月23日~8月9日

行程 在所一大石一秋田仙北郡浅舞村一鳥海山矢嶋口一酒田一羽黒山一月山一本道寺一左沢一山形一仙台加美郡門沢村一吉岡一三集町一金成町一衣川一在所(図1)

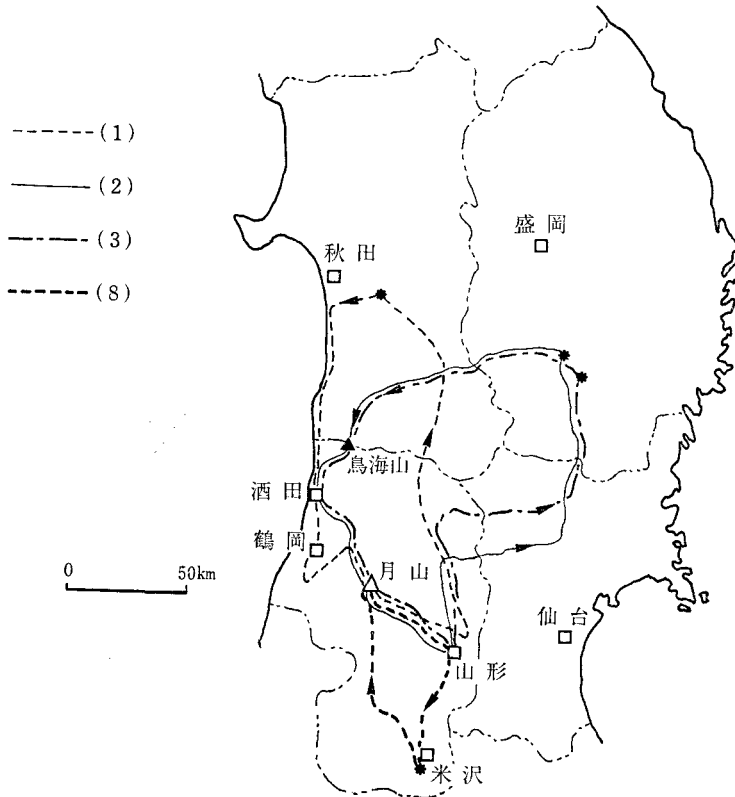


図1 北東北からの出羽三山参詣(●は各行程の起終点、以下の図も同様)

(3)表題 和光院文書²¹⁾

筆者 陸奥国江刺郡増沢村(岩手県江刺市増沢) 和光院晁盛 同行16人

期間 安政4年(1857)7月2日~16日

行程 在所一瀬端一小松川一大沢一矢島一鳥海山一酒田一田川一羽黒山一月山一本道寺一山形一山寺一篠森一岩ヶ崎一在所(図1)

前章において、北東北からの出羽三山参詣は伊勢西国巡礼の途中に立ち寄る場合が多いことに触れたが、例外的な道中記も若干残されている。ここに紹介した3点の道中記に共通する特徴は、いずれも出羽三山と共に鳥海山に登拝している点である。

前稿で指摘したように²²⁾、岩手県内には出羽三山参詣の民俗事例として、「最上参り」と称される形態、すなわち出羽三山と鳥海山の両方に登拝してくる参詣がみられる。これら3点の道中記から、この「最上参り」という参詣の

慣習が既に江戸時代に確立していたことが明らかになった。

また(2)と(3)の大徳院文書と和光院文書は、末派修験の里先達を勤めた家に伝来する史料である。とりわけ和光院文書には、天保12年(1841)から明治34年(1901)に至る60年間に計12回出羽三山に参詣した記録が残されている。

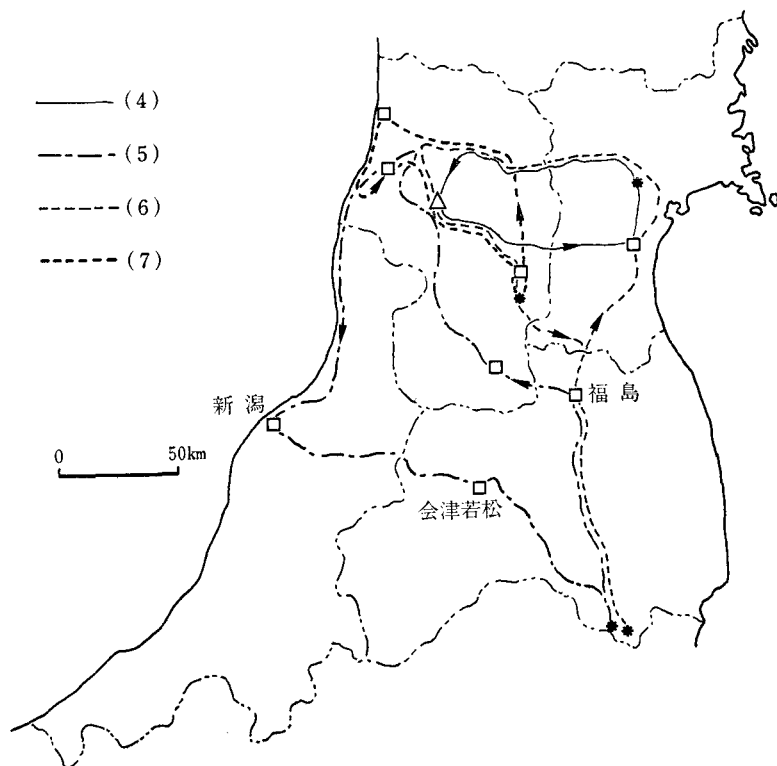
紺野博夫の紹介によれば²³⁾、「コースは普通秋田県廻りと宮城県廻りと二様になっている」とされるが、これは鳥海山の登拝口に左右される。すなわち、矢島口から登拝する場合は秋田県廻りのコース、庄内側の吹浦口から登拝する場合は宮城県鳴子から最上川沿いに庄内平野へ入るコースが利用されるということになる。

次に、南東北からの事例を紹介しよう。

(4)表題 湯殿山道中記²⁴⁾

筆者 陸奥国黒川郡成田村(宮城県黒川郡大郷町) 齊兵衛 同行18人

期間 文久元年(1861)7月20日~26日



2 南東北からの出羽三山参詣

行程 在所—吉岡町—門沢—銀山温泉—尾花沢—大石田—肘折—月山—湯殿山—志津—本道寺—寒河江—山寺—二口峠—愛子—仙台—在所 (図2)

(5)表題 湯殿山参詣日記帳²⁵⁾

筆者 陸奥国白川郡金沢村 (福島県東白川郡矢祭町) 清蔵

期間 文久2年(1862)7月10日~26日

行程 在所—矢吹—二本松—板谷峠—米沢—大井沢—志津—湯殿山—大網—羽黒山—三瀬—大沢—乙—新発田—新瀉—村松—津川—柳津—会津若松—白河—棚倉—在所 (図2)

(6)表題 道中記²⁶⁾

筆者 陸奥国白川郡戸塚村 (福島県東白川郡矢祭町) 古西屋庄次右衛門

期間 天保11年(1840)7月18日~8月4日

行程 在所—須賀川—二本松—藤田—岩沼—塩釜—吉岡—銀山温泉—古口—羽黒山—月山—白岩—楢下—福島—須賀川—在所 (図2)

(7)表題 御山参詣御見舞受納并入用覚²⁷⁾

筆者 出羽国村山郡宮脇村 (山形県上山市宮脇) 神保家文書 同行10人

期間 安永7年(1778)7月14日~21日

行程 在所—大石田—清川—酒田—加茂—大山—鶴岡—羽黒山—月山—志津—白岩—山形—在所 (図2)

(8)表題 湯殿山参詣道中村尽²⁸⁾

筆者 山形県南置賜郡小野川村 (米沢市小野川町) 斎藤山三郎

期間 明治28年(1895)旧6月16日~18日

行程 在所—米沢—小松—今泉—鮎貝—黒鴨—地藏峠—大井沢—志津—湯殿山—志津—本道寺—寒河江—山形—上山—赤湯—米沢—在所 (図1)

南東北からの出羽三山参詣の事例を5点あげたが、(8)を除いて近距離の割には時間をかけた参詣となっている。(5)と(6)はすぐ近くの村であるが、かなり異なったルートを選んでおり、出羽三山参詣の行程が必ずしも定型化されてい

なかったことを示している。

また、社寺参詣の旅においては馬や駕籠、あるいは船などの交通手段が利用されることはあまりなく、通常は徒歩に頼ったが(徒歩による参詣自体が苦行性を有していたと想定される)、例外的に最上川水運が出羽三山参詣者にしばしば利用された。それも、夜舟として夜行便の利用が多くみられる。たとえば(4)では大石田—鳥川間、(7)では大石田から酒田まで川舟を利用している。

もっとも、(8)では寒河江から山形まで馬車に乗っており、近代交通機関の登場により社寺参詣の旅にも変化のきざしが現われてきた頃の事例といえよう。

それでは、新潟県および北関東からの事例の紹介に移りたい。

(9)表題 湯殿山道中記²⁹⁾

筆者 越後国中蒲原郡鎌倉新田 (新潟県蒲原郡小須戸町) 小柳家文書

期間 寛政7年(1795)7月10日~8月1日

行程 在所—菅谷不動—乙宝寺—笹川流れ—温海—鳥海山—羽黒山—月山—湯殿山—山寺—松島—仙台—二本松—会津若松—坂下—津川—五泉町—金津—在所 (図3)

(10)表題 三御山参詣諸雑日記³⁰⁾

筆者 新潟県中蒲原郡満願寺村 (新津市満願寺) 星野久吾

期間 明治5年(1872)7月15日~27日

行程 在所—乙宝寺—村上—湯田川—金峰山—注連寺—湯殿山—月山—羽黒山—松山—鳥海山—酒田—大山—三瀬—温海(一船で新潟へ)—在所 (図3)

これら以外に、『新潟県史』に収録されている佐渡からの2点の道中記は、出羽三山に加えて善光寺あるいは相模大山に参詣するという諸国巡拝的な旅となっている³¹⁾。また、水原に残る山口和の道中日記は、和算家の旅の記録として貴重とされている³²⁾。

(11)表題 湯殿山参詣道中記³³⁾

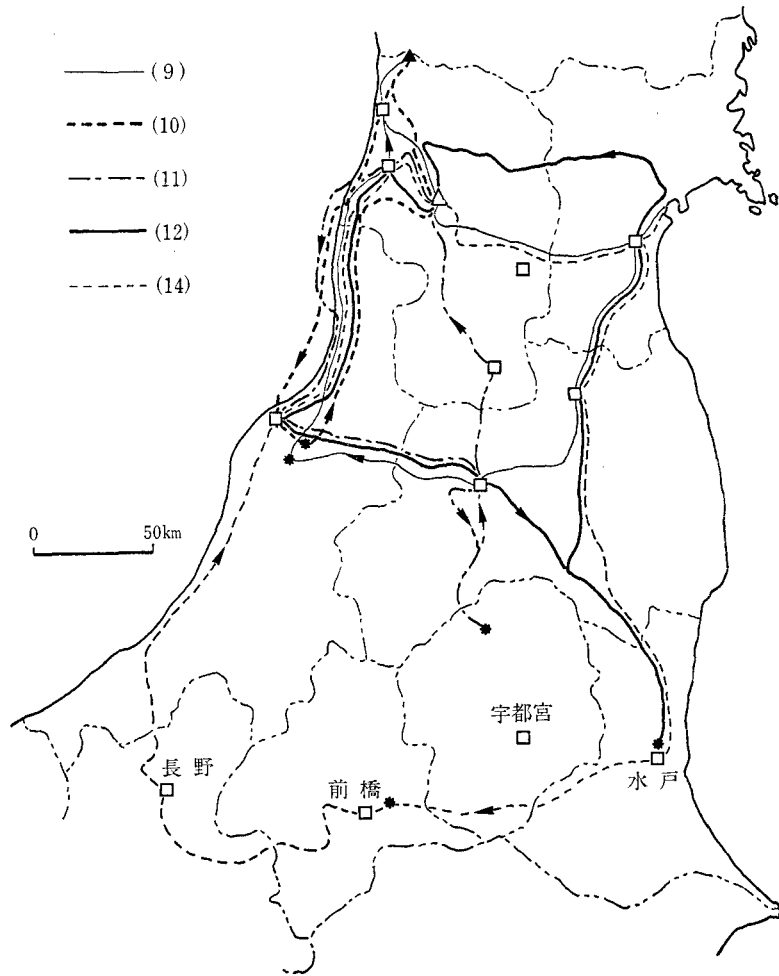


図3 新潟・北関東からの出羽三山参詣

筆者 下野国塩谷郡下塩原村（栃木県那須郡塩原町） 坂内半之助 同行17人
 期間 慶応元年(1865)閏5月7日～27日
 行程 在所—田島—大内—会津若松—米沢—小松—鮎貝—大井沢—志津—湯殿山—月山—羽黒山—鶴岡—三瀬—原見（一船で岩船へ）—乙宝寺—菅谷不動—新潟—津川—会津若松—柳津—大内—在所（図3）

(12)表題 奥道中記³⁴⁾
 筆者 常陸国茨城郡千波村(茨城県水戸市) 深作平右衛門
 期間 天保12年(1841)7月18日～8月21日

行程 在所—塙—二本松—白石—仙台—塩釜—松島—門沢—銀山温泉—尾花沢—清水—狩川—羽黒山—月山—湯殿山—鶴岡—温海—村上—新発田—新潟—津川—会津若松—白河—棚倉—戸塚—太田—在所（図3）

(13)表題 月山湯殿山羽黒山道中日記³⁵⁾
 筆者 下総国葛飾郡日光道中中田山崎（茨城県古河市中田） 今泉五吉衛門
 期間 文政10年(1827)6月4日～7月20日
 行程 在所—下妻—笠間—水戸—八溝山—須賀川—福島—仙台—塩釜—松島—門沢—銀山温泉—尾花沢—狩川—羽

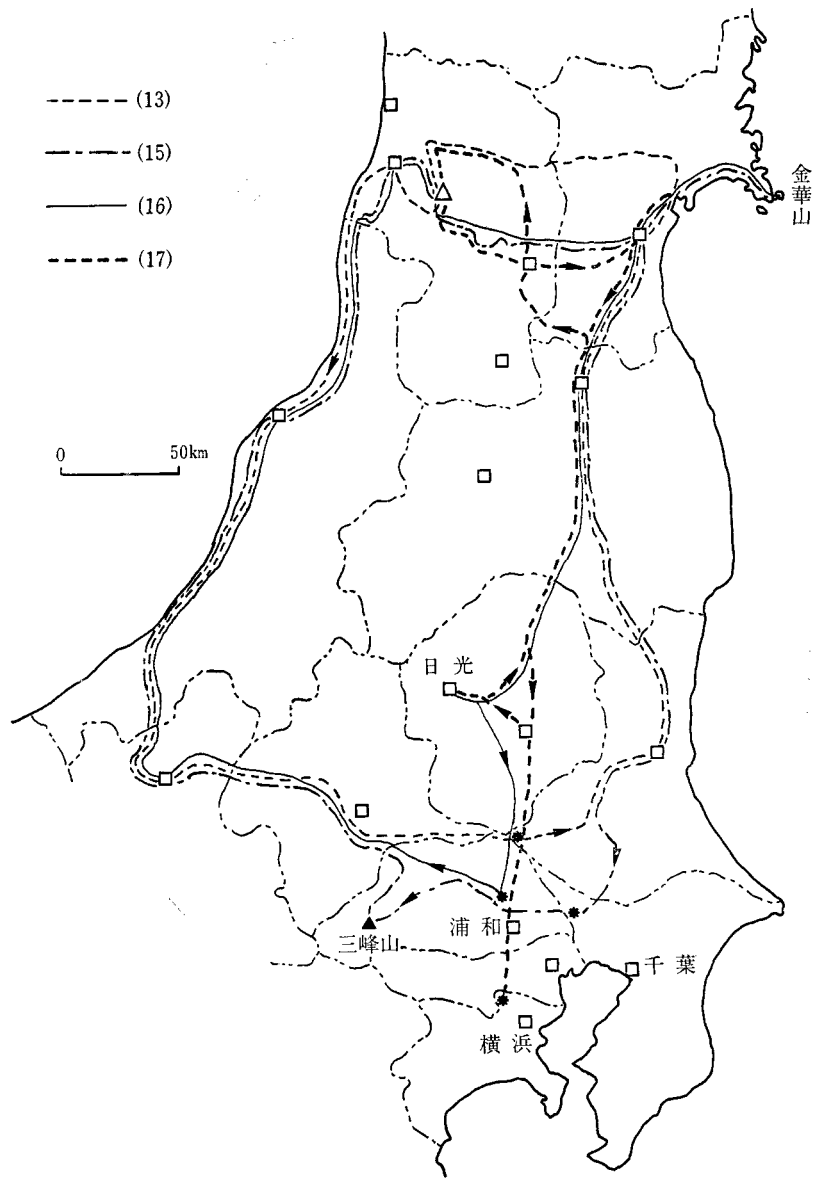


図4 南関東からの出羽三山参詣

黒山一月山一湯殿山一鶴岡一村上一
 新潟一高田一戸隠一善光寺一草津温
 泉一沢渡一高崎一在所 (図4)

(14)表題 羽黒山湯殿山月山道中記³⁶⁾

筆者 上野国勢多郡中根村(群馬県太田市)
 齋藤栄吉

期間 天保9年(1838)6月10日～7月9日

行程 在所一前橋一伊香保一安中一軽井沢
 一上田一善光寺一戸隠一高田一柏崎
 一弥彦一村上一鶴岡一羽黒山一月山
 一湯殿山一岩根沢一大沼一山寺一二
 口峠一仙台一塩釜一白石一矢吹一水
 戸一笠間一在所 (図3)

北関東からの出羽三山参詣は、(1), (12)の事例

のように越後へ回ったり、さらには(13)、(14)のように長野善光寺にまで参詣するといった大回遊ルートがとられているのが特徴となる。

最後に南関東からの事例であるが、まず千葉県は出羽三山信仰の盛んな地であり、出羽三山参詣道中記をとりあげた論文もいくつかみられるので、事例の紹介は1点にとどめ、他は概略を引用したい。

(15)表題 奥州道中記³⁷⁾

筆者 下総国葛飾郡野々下村(千葉県流山市) 戸部家文書

期間 文政7年(1824)6月28日～8月19日

行程 在所一鴻巣一白久一三峰山一高崎一伊香保一榛名山一草津温泉一善光寺一戸隠一高田一柏崎一新潟一村上一湯田川一金峰山一鶴岡一羽黒山一月山一湯殿山一本道寺一大沼一寒河江一山寺一二口峠一仙台一塩釜一松島一石巻一鮎川一金華山一鮎川一松島一仙台一福島一矢吹一八溝山一水戸一笠間一加波山一筑波山一土浦一在所(図4)

この事例のように、千葉県からの出羽三山参詣の場合でも、善光寺詣りをすませてから日本海側を経由して出羽三山に向かう行程が散見する³⁸⁾。また、往路に日光へ参詣して帰路は太平洋岸沿いに戻るコース³⁹⁾、あるいはその逆コースをとる事例も若干みられる⁴⁰⁾。

(16)表題 湯殿山道中記⁴¹⁾

筆者 武蔵国北足立郡伊奈村羽貫(埼玉県北足立郡伊奈町) 加藤精益

期間 慶応元年(1865)閏5月18日～7月16日

行程 在所一高崎一伊香保一榛名山一草津温泉一中野一善光寺一戸隠一高田一柏崎一新潟一乙宝寺一村上一湯田川一羽黒山一月山一湯殿山一本道寺一山寺一二口峠一仙台一白石一二本松一白河一今市一日光一今市一壬生一古河一在所(図4)

この(16)も、基本的には(15)と同じコースを辿っ

ている。善光寺、出羽三山と共に金華山にも参詣するという2ヶ月近い大旅行の記録となっている。

(17)表題 出羽国道中日記覚帳⁴²⁾

筆者 武蔵国都筑郡上川井村(神奈川県横浜市旭区) 中野権作衛門 同行25人

期間 天保12年(1841)7月2日～27日

行程 在所一宇都宮一今市一日光一今市一大田原一白河一須賀川一福島一上戸沢一楢下一天童一尾花沢一古ロ一清川一羽黒山一月山一湯殿山一本道寺一大沼一山形一笹谷一仙台一松島一仙台一瀬ノ上一大田川一芦野一作山一在所(図4)

以上、17点の出羽三山参詣道中記について、その概要を解説したが、次章では、これら出羽三山参詣の旅に共通してみられる特徴に関して検討を試みたい。

V. 出羽三山参詣の廻国巡礼的性格

前章で復原した出羽三山参詣の行程に共通する特徴をあげれば、目的地が出羽三山であっても、わざわざ迂回コースをとって、善光寺や日光、金華山といった著名な社寺に立ち寄っていることである。

また、岡倉捷郎の指摘のように、関東からの出羽三山参詣の途中に板東三十三所、あるいは秩父三十四所霊場の札所に立ち寄る事例がかなりみられる⁴³⁾。さらに、仙台北町等の町場では何日間か滞在する場合もしばしばあり、これらの特徴から、序章で述べたような「物見遊山」論が提唱されたものと思われる。

しかし、この「物見遊山」論は、単に出羽三山参詣の旅の行動空間の表層のみを分析した結果にすぎないのではなからうか。我々には、江戸時代の大衆的な社寺参詣の行動空間の背後に「かくれている構造⁴⁴⁾」としての深層構造へと分析を進めることが要求されている。

そこで本章では、出羽三山参詣の旅を、従来とは異なった視点から検討を加えてみたい。

前章で復原した参詣行程図（図1～4）を比較すると、そこにひとつの共通項が浮かびあがってくる。それは、参詣の旅がいずれも循環的行程を有しているという点である。すなわち、往路と復路とは異なる街道を經由し、同じルートを再び辿ることはないという点である。もちろん、この循環的行程は原則論としてであり、山岳霊場や離島といった往復に同一経路をとらざるを得ない場合、あるいは帰路のごく一部が重なるといった例外は存在する。

前章の17例のうち、この循環的行程をとらないのは、わずかに(17)の1例のみである。しかも(17)の場合も、往路に休息・宿泊した宿場は帰路にはほとんど利用していないという行程を読みとることができる。出羽三山への遠近にかかわらず、共通して循環的行程が存在することを、どう解釈すべきなのであろうか。

筆者は、この循環的行程に信仰の旅の本質を見出したい。第Ⅱ章で指摘したように、旅とは日常生活世界を離れて、未知の非日常的空間へと行動する過程である。とりわけ信仰の旅の場合は、俗世間を離れて霊場へと参詣する行動となり、聖なる路を歩む旅となる。

その際、ひとたび通過し、道中記に記録された既知の空間は、聖性を喪失して俗なる空間に転換してしまうのであり、そのため、常に眼前に展開する未知の聖なる空間へ向かって前進することが要求され、その結果として、社寺参詣の行動空間が循環的行程を有するに至ると理解したい。

これについては既に山本光正が、「六点の旅日記に共通していることは、往路と帰路を使い分けている点である」との指摘を行っている⁴⁵⁾。しかし山本の結論は、先に述べたモデルルート論にとどまり、むしろ「旅の形式化」という「物見遊山」論につながる面が強調されている。

さて、循環的行程をとる社寺参詣として、いわゆる巡礼がこれに該当する。わが国における巡礼としては、西国三十三所巡礼や四国八十八所遍路、あるいは前述の坂東・秩父巡礼がよく知られており、研究書も多い⁴⁶⁾。関東地方の出

羽三山碑の中には、西国・坂東・秩父巡礼を同時に刻する石碑が相当数存在することが報告されており⁴⁷⁾、この点を併せ考慮すれば、当時の参詣者には出羽三山参詣を「みちのく巡礼行」という風にとらえる空間認識が存在した、と想像をたくましくしてもよいのではなかろうか。

VI. おわりに

前章で、近世の出羽三山参詣に循環的行程が存在することを指摘したが、出羽三山参詣のみにこの特徴がみられるのではなく、伊勢西国参詣の場合にも同様の循環的行程がみられることは、既に述べたように山本光正が示唆している⁴⁸⁾。さらに、斎藤・古田が論じるように、江戸から相模大山と江の島に参詣する際には周遊ルートが形成されていた⁴⁹⁾。

このように、本稿では、いわゆる巡礼に限らず、近世の社寺参詣全般が循環的行程を有していたという仮説を提起したい。社寺参詣は俗世間を離れて聖なる未知の世界へと歩む信仰の旅である、という理解のもとに。

ところで、近世にこのような“聖なる円環の旅”としての社寺参詣が隆盛をみるに至った歴史的背景についての見通しを述べておくことが必要であろう。

中世において、巡礼の多くは遍歴民であり、いわば半ば職業的な巡礼であったといわれる⁵⁰⁾。また、中世の社寺参詣は、たとえば熊野那智参詣マンダラの画中にみられるように、先達に導かれる場合が多かったようである⁵¹⁾。中世においては、限られた人々のみが聖なる旅に出ることが可能で、旅立つことを許されない多くの庶民は、せいぜい参詣マンダラの絵解きによって社寺参詣の擬似体験をするより他になかった時代であった。

それが近世に入ると社寺参詣の旅も庶民化し、木版刷の名所図会や道中記が大量に作られて普及したため、先達なしに旅をすることが可能となった。ところが一方では、そのために、社寺や霊山の有していた聖性神秘性が白日のもとにさらされるという事態にたち至った。

そこで、社寺参詣の旅を物見遊山に終始させることなく、また社寺の聖性の喪失を回復すべく創意せられたのが“聖なる円環の旅”ではなからうか。事実、福田・プルチョウによる限り、中世の旅には循環的行程は顕著ではない⁵²⁾。筆者の現時点での見通しとして、近世の社寺参詣の大衆化の代償として、この循環的行程が成立したと想定しておきたい。

ただ、参詣道中記の文面には確かに物見遊山に関する記録の多いことは事実であり、筆者も近世の社寺参詣の旅の大衆化にともなう物見遊山の側面を全否定するものではない。

しかし、出羽三山を例にしても、とりわけ湯殿山の場合は「語られぬ湯殿にぬらす袂かな」と芭蕉の句にもあるように、参詣の詳細については決して他人に口外すること無かれという秘所的性格を有していた。大なり小なり、いずれの聖地もこのような秘所性を有していたものと考えられる。

すなわち、実際に参詣した体験が重要視されたのであり、道中記にも聖地での宗教体験はあえて記されなかったとみたほうがよからう。したがって、道中記に記されなかった聖地における宗教体験に関する検討を行わずして、道中記の表面的な記載から近世の社寺参詣を物見遊山ときめつけることは、早計に過ぎるのではなからうか。

ともあれ、近世においても、人々は自らの生活空間を離れて旅に出ることは原則として許されなかったが、社寺参詣という大義名分のもとに旅することは認められていた。最後に、近世の社寺参詣がはたして自らの意志による自由な旅であったのかという問題点に言及して本稿をしめくりたい。

結論から言えば、近世の社寺参詣は村落内に存在する講集団を基盤としており、選ばれた人々が代参という形で旅に出るのが一般的であったため、そこには個人の意志が入りこむ余地は少なく、むしろ村落共同体を代表して参詣するという点では自由な旅とは言いがたい。また、参詣費用も講の掛金や村人からの銭別に多くを

依存するため、共同体的規制に束縛された旅とみる方が妥当であろう⁵³⁾。なによりその行程は“聖なる円環の旅”として規制され、たとえ心ひかれる場所があろうとも、再びそこに戻ることは許されない旅であった。

さらに、社寺参詣の旅に共同体の通過儀礼的側面が存在することは前稿で指摘した⁵⁴⁾。この点は位相地理学の立場から解釈することが可能である⁵⁵⁾。すなわち、“聖なる円環の旅”は常に未知の空間へと前進していく旅であるが、最後に辿りつくのは出発した村という既知の空間となり、いわば、聖と俗とは表裏一体となっているという「メビウスの輪」の上を進む位相空間として把握することができる。

この時、共同体にとって、戻ってきた参詣者は旅だつ前のムラビトとしてではなく、マレビトとして迎えられる。つまり、村境で行われるサカムカエの行事は、マレビトから再びムラビトへと変換させる儀礼ということになる。同様に、出発前の行屋精進は、ムラビトからマレビトへの変換の儀礼ととらえることができる⁵⁶⁾。

そして、この「メビウスの輪」をくぐりぬけることによって、また異文化体験で見聞し得た知識のゆえに、参詣者の村落内での地位が一段高まるという通過儀礼的性格を有しているのである。すなわち、社寺参詣の旅は、儀礼の過程としても重要な意味を有している。

以上、出羽三山参詣道中記を題材として、近世の社寺参詣の旅についての私見をまとめてみた。もとより、試論にとどまる部分も多いが、今後も、道中記や参詣マンダラを通して中近世の社寺参詣に対する理解を深めていきたい。

(山形大学)

〔注〕

1) 五来重他『日本の旅びと』大阪書籍, 1983.

H. E. プルチョウ『旅する日本人』武蔵野書院, 1983.

ドナルド・キーン『百代の过客一日記にみる日本人』朝日新聞社, 1984.

林英夫他『旅と街道』光村図書, 1985.

- 五十嵐富夫『日本紀行文学の研究』柏書房、1986.
- 中田嘉種『歴史のなかの紀行 東日本・西日本・北日本海外』そしえて、1986.
- 児玉幸多『近世交通史の研究』筑摩書房、1986.
- 交通史研究会編『日本近世交通史論集』吉川弘文館、1986.
- 丸茂武重『中世の旅人たち』六興出版、1987.
- などをあげることができる。なお、専門学会として交通史研究会が発足し、1976年より学会誌「交通史研究」を発行している。
- 2) 桜井邦夫「近世における東北地方からの旅」駒沢史学34、1986、144頁。
- 3) 新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房、1982、1頁。
- 4) 今野信雄『江戸の旅』岩波新書、1986.
- 5) 山本光正「旅日記にみる近世の旅について」交通史研究13、1985、69～70頁。
- 6) 原田伴彦『道中記の旅』芸艸堂、1983.
- 7) 小野寺淳「伊勢参宮道中日記の分析」東洋史論2、1981、1～8頁。
- 桜井邦夫、前掲2) 参照。
- 山本光正、前掲5) 参照。
- 小松芳郎「道中記にみる伊勢参詣」信濃38—10、1986、13～30頁。
- 酒井敏明「紀行にみる伊勢と伊賀の道」(水津一朗先生退官記念事業会編『人文地理学の視園』大明堂、1986) 333～343頁。
- 8) 西垣晴次「近世伊勢信仰の研究 成果と課題」(西垣晴次編『伊勢信仰II 近世 民衆宗教史叢書第13巻』雄山閣、1984) 340～341頁。
- 9) 前掲5)、7) 参照。
- 10) 前掲2) 参照。
- 11) 拙稿「道中記にみる近世の出羽三山登拝」東北生活文化論文集6、1987、4～12頁。なお、この論文において、山岳宗教集落から出羽三山(月山・湯殿山・羽黒山)登拝の行程については検討を終えたため、本稿では、旅だちから山岳宗教集落までの往復の行程を考察の対象とする。
- 12) 拙稿「出羽三山信仰圏の地理学的考察」史林66—1、1983、83～128頁。
- 13) 拙稿「出羽三山参詣道中記史料集 科学研究費報告書」山形大学教養部、1986、20頁。なお、表1にはその後、所在の判明した史料を加え、修正を行っている。
- 14) 前掲12) 参照。
- 15) 小野寺淳「道中記にみる伊勢参宮ルートとその変容(発表要旨)」歴史地理学133、1986、34～35頁。
- 16) 前掲12) 参照。
- 17) 前掲5) 参照。
- 18) 前掲5) 参照。
- 19) 鶴岡市 戸川安章氏所蔵。その内容は、戸川安章「河辺郡船岡村五十嵐孫之丞の三山参拝記」(瑞木8、1943、1～23頁)に紹介されている。
- 20) 北上市 菅原氏所蔵。その概要は、紺野博夫「東北地方農村における羽黒三山参詣に関する一考察」(岩手史学研究23、1956、26～36頁)に紹介されている。
- 21) 江刺市増沢 菅原氏所蔵。その概要は、前掲20) 紺野論文に紹介されている。
- 22) 前掲12) 参照。
- 23) 前掲20) 参照。
- 24) 『大郷町史 史料編2』1984、808～810頁。
- 25) 矢祭町金沢 石井博氏所蔵。『矢祭町史第2巻 史料編1』1983、436～443頁。
- 26) 矢祭町戸塚 藤井二郎氏所蔵(福島県歴史資料館に寄託)。なお、同時期の「湯殿山代参之銭別受納帳」も残されている。
- 27) 寺尾満編『湯殿山参詣記覚書』宮脇郷土史友会、1981、4～5頁。
- 28) 『三沢郷土誌』三沢公民館、1981、220～224頁。
- 29) 『小須戸町史』1983、351～353頁。
- 30) 『満日郷土史』1977、230～231頁。
- 31) 『新潟県史 資料編9近世四』1981、1003～1007頁。
- 32) 松崎利雄「山口和『道中日記』抄」数学史研究66、1975、24～48頁。
- 33) 『塩原町誌』1980、493～497頁。
- 34) 茨城県立歴史館所蔵深作家文書。
- 35) 鶴岡市立図書館所蔵(山形県立博物館に展示中)。
- 36) 鶴岡市立図書館所蔵。
- 37) 『流山市史料集 第5集』1974、79～91頁。
- 38) 対馬郁夫「行屋精進と奥州参り一湯殿山道中記を中心として一」千葉県立上総博物館研究員紀要3、1984、19～29頁。
- なお、飯白和子「出羽三山信仰とムラの人々」(我孫子市史研究6、1982、147～171頁)には、

- その逆コースの道中記が紹介されている。
- 39) 岡倉捷郎「北国道中旅日記—奥三山参詣にみる旅の今昔—」あしなか183, 1983, 14~21頁.
- 40) 森操「明治初年における出羽三山参拝記録」上総市原1, 1976, 119~130頁.
篠田惣次「長柄町に於ける三山信仰」(『長柄町史』1977) 406~466頁.
対馬郁夫「出羽三山信仰」(『市原市史 中巻』1986) 752~817頁.
- 41) 埼玉県立文書館収蔵加藤家文書.
42) 神奈川県立文化資料館収蔵中野家文書.
43) 岡倉捷郎「三山参りと札所巡礼」あしなか191, 1985, 1~20頁.
44) 菊地利夫『新訂歴史地理学方法論』大明堂, 1987, 63頁.
45) 前掲5) 参照.
46) 本稿の立場に近いものとして, 真野俊和『旅のなかの宗教—巡礼の民俗誌』(NHKブックス, 1980) をあげておきたい.
47) 前掲43) 参照.
48) 前掲5) 参照.
49) 斎藤毅・古田悦造「「地の島」に関する空間認知とその変容—神奈川県江の島の場合—」人類科学39, 1987, 81~93頁.
50) 前掲46) 参照.
51) 黒田日出男「那智参詣曼荼羅を読む」思想740, 1986, 103~131頁.
拙稿「西国霊場の参詣曼荼羅にみる空間表現」(水津一郎先生退官記念事業会編『人文地理学の視園』大明堂, 1986) 345~356頁.
- 52) 福田秀一・プルチョウ編『日本紀行文学便覧—紀行文学から見た日本人の旅の足跡—』武蔵野書院, 1975. なお, 本稿で述べた中世の旅から近世の旅への変化は, あくまでも概括的見通しであって, その立証には, たとえば, 西山克『道者と地下人—中世末期の伊勢』(吉川弘文館, 1987) にみられるような周到な聖地の分析を積み重ねなければならない.
- 53) 近世における代参講の規約については, 拙稿「講の機能と村落社会」(戸川安章編『寺と地域社会 仏教民俗学大系7』名著出版, 近刊) において紹介した.
- 54) 前掲12) 参照. なお, 成人儀礼としての社寺参詣や霊山登拝については, 桜井徳太郎『日本民間信仰論増訂版』(弘文堂, 1970), 岩科小一郎『山の民俗』(岩崎美術社, 1968) で触れられている.
- 55) 水津一郎『地域の構造』大明堂, 1982.
56) 小松和彦『異人論』青土社, 1985.
なお, 前掲12) の拙稿において指摘した, 参詣装束を死装束とする民俗事例がしばしばみられる点は「マレビト論」と関連させながら論じることが可能と思われるが, 今後の課題としたい.

〔付記〕

道中記史料の収集に際し, 御協力をいただいた所蔵者の方々, ならびに所蔵機関各位に謝意を表します。なお, 本研究には文部省科学研究費奨励研究A (課題番号60780256) を使用した。

ON TRAVEL DIARIES TO MT. DEWA-SANZAN

Michiaki IWAHANA

In recent years, there has been remarkable progress in the study of Japanese historical transportation and travel. However few articles on traveling for sacred places have been written by historical geographers.

In this article, the author aims to clarify the characteristics of travel diaries to *Dewa-Sanzan* in the Edo and the early Meiji Era.

Dewa-Sanzan (three holy mountains in *Dewa* Province, namely Mts. *Yudono*, *Haguro* and *Gassan*) in Yamagata Prefecture is one of the most famous sacred mountains

in Japan. Many travelers came to *Dewa-Sanzan* from Eastern Japan. Some of them wrote travel diaries. The author searched for travel diaries to *Dewa-Sanzan*. As a result of search, more than 100 travel diaries have been collected.

Travel diaries are the record of visiting unusual spaces. The author reconstructed the travel routes from diaries on maps. As a result, it became clear that most of travel routes made in a circulation, namely travel to *Dewa-Sanzan* looked like a pilgrimage. So it is concluded that this travel was not a sight-seeing, but a religious travel. Moreover travelers were delegates of their community, and this travel was concerned in the ritual process.